

93 「日本語はどこから？」

もう30年以上前のことになると思う。NHKテレビで「日本語はどこから来たのか？」というタイトルだったと記憶するが、当時学習院大学教授で国語学者の大野 晋氏のドキュメンタリー番組を見た。言葉のことに感心を持っていたので、とても興味深く見たことを記憶している。

ビデオ録画して最近までテープを保管していたが、湿気で一部にカビが発生してきたこと、場所取りなどの問題がありほとんど処分してしまい、残念ながら今は残っていない。

その当時は、理路整然とした番組の説明を聴き「日本語の起源はタミル語だったのか！」と本気で信じていた。大野教授といえば、多くの著書がある日本語学者の第一人者で、NHKが番組で取り上げるほどだから、多くの人に影響を与えたことと思う。

ところが、この「日本語タミル語起源説」は多くの言語学者の批判を浴びた。特に比較言語学者からの批判が激しかった。比較言語学とは、一言で言えば“言語の親族関係を明らかにする”学問である。

一つの言語だけをみつめていたときにはわからなかった新しい事実を発見し、それを比較して説明するもので、系統や親縁性などの関係を明らかにしていく。

系統の明らかでない日本語を母語とする我々にとって、どんな言葉にその起源があるのか？といったことには興味があって当然である。

そのまま何年も経ってしまったある時、「言語が違えば、世界も違ってみえるわけ」という本を見つけた。出版は2013年、著者は「Guy Deutscher (ガイ・ドイッチャー)」というケンブリッジ大学の言語学者、翻訳は椋田直子氏である。

この本は、言語は思考・知覚をどう変えるのか？といったテーマを深く掘り下げたもので、興味が尽きなかった。ざっと内容を紹介しますと、

- 第1章 虹の名前「ホメロスの描く空が青くないわけ」・・・「葡萄酒色の海」のミステリー・・・古代ギリシャ人は色弱だったのか
- 第2章 真っ赤なニシンを追いかけて「自然と文化の戦い」・・・色感は進化する？キリンの首、心の目
- 第3章 異境に住む未開の人々「未開社会の色の認知からわかること」・・・色の違いと色の名前、人類学のガリレオ、三つの思考実験、文化の勝利
- 第4章 われらの子どもをわれらよりまえに語った者「なぜ“白、黒、赤、...”の順に色名が生まれるのか」・・・驚くべき発見・・・制約の中での自由、色彩を超えて
- 第7章 日が東から昇らないところ「前後左右でなく東西南北で伝える人々の心」・・・カンガルーとグーグー・イミディル語・・・自己中心座標と地理座標、鼻を南に向けて泣く、海側の頬にパン屑、絶対方位感覚、相関関係か因果関係か
- 第10章 女性名詞の“スプーン”は女らしい？「言語の性別は思考にどう影響するか」・・・“ウーマン”は男性？“飛行機”は植物？男性名詞・女性名詞の影響を確かめる実験、言語の性別、その豊穡な世界
- 第11章 ロシア語の青「言語が変われば、見る空の色も変わるわけ」・・・日本のアオ信号、脳を覗いてみる

この本は色と言葉の不思議な関係を追求していて、例えば「互いに関係のない多くの言語において、色名が同じような順序で進化してきたのはなぜか？それぞれの文化が独自の環境にしたがって、色彩語

彙を精密にすることができるなら、極地から熱帯まで、アフリカからアメリカまで、世界各地の人々が虹の七色のうち一色にしか色名を持たない場合、それが赤なのはなぜか？砂漠の言語なら、黄色を表す色名だけあればよさそうなものだ。密林の言語なら、緑と茶と青を表す色だけあればいい。が、そんな言語は存在しない。」といった疑問について論じている。

このようなことに対する私自身の興味は徐々に強くなり、今井むつみ著『ことばと思考』を読み、それをもとに博想録「39 ことばと思考」を書いた。言葉は色の認識ばかりでなく、モノの認識、性の認識、空間の認識、時間の認識についても大きくかかわってくる。

そして次に見つけたのが、松本克己著「世界言語のなかの日本語」という本である。これは新聞の新刊紹介で知りすぐに入手した。この本の第2章に「日本語・タミル語同系説批判」が載っていた。

「日本語・タミル語同系説批判」に入る前に述べておかななくてはならないことは、現在でも「日本語の系統は不詳」ということである。

以下『地球ことば村HP』より引用（斜字体）

「日本語はどこから来たのか？」という問に対しては、2つの正しい答があります：

(1) 分からない。

(2) どこから来たのでもない。

(1) まず、なぜ「分からない」が正しい答なのかについて考えましょう。

ヒトの集団は、そもそもの始めから何らの言語をもって旅に出ました。集団が分かれるとき、前の集団の言語を携えて別の道を歩きました。集団の分岐は、言語の伝搬です。ですから、一つの言語には必ず親言語がありました。この素朴な過程は否定できません。

今から2世紀前にインド語が英語やドイツ語によく似ていることに気付いて、これらの言語が遠い親類ではないかという思いつきを語った人がいました。そしてたちまちに多くの優れた研究者がこのロマンを学問に仕立て上げました。それが19世紀の素朴進化論的な歴史比較言語学でした。

20世紀のはじめ頃、日本語の来歴についても歴史比較言語学の方法を用いて研究しようとする研究者が洋の東西に現れました。日本語系統論が始まったのです。上代の古い日本語の諸相が琉球語・朝鮮語・アルタイ語と比較されました。しかしヨーロッパの印欧比較言語学のようなきれいな対応関係はどこにも見つかりませんでした。もちろんアイヌ語との系統関係も問題にされましたが、幾つかの特別な語彙に借用らしい関連を発見するにとどまりました。この経緯を総括したのが服部四郎『日本語の系統』（1979、岩波）です。一方で、日本語がレプチャ語やタミル語と同系統であるというような眉唾ものの言説もありました。また日本語アルタイ起源説では資料を強引に引き当てるなどの無理が繰り返されてきました。そのために日本の言語研究では「日本語系統論に関わらないこと」が学風にさえなってきたのでした。

しかし今世紀になって「国際日本文化センター」が中心になって系統論が再び国際的に論議され始めました（日文研叢書31『日本語系統論の現在』2003）。日本語系統論に長年関わってきた外国人研究者を含めた数年にわたる論議の結果は、服部さんと同じく「日本語の系統は不詳」です。第一に、日本語との親族関係を確認できるのは琉球語（沖縄諸語）だけであること、第二に、親族関係を想定できる言語は朝鮮語だけであること、第三に、朝鮮語のうち、扶余系の古い言語資料が不十分であること、第四に、語彙と文法要素の対応が体系的でなくむしろ断片的であることなど、比較言語学の方法が効か

ないことが多すぎるということが再び明らかになりました。

今回の共同研究では、比較言語学的方法だけではなく、言語類型地理論的アプローチ（松本克巳さん）や、特に外国の研究者による分類学的・類型論的な試みが論じられました。しかし日本語の系統はやはり立証できないというのが今の結論です。つまり、それは分からないのです。

(2) 次いで、日本語はどこから来たのでもないという二つ目の正しい答えについて考えましょう。「どこから来たのでもない」というのは、日本語がここ日本列島のどこかで生まれたと主張することになります。それには二つのシナリオが考えられます。その一つは、ある移住集団が固有の言語を持ってきたが、その集団の故郷では親戚が死に絶えたという場合、二つ目は、二つの言語が日本で混淆してまったく新しい言語が出来たという場合です。

第一のシナリオは可能性ががあります。扶余系言語が縄文末期～弥生時代の初期に日本列島の西部から侵略を開始した。大陸・半島に残った親の系列言語は、その後、例えば、渤海の滅亡によって死滅したという場合です。このシナリオでは、日本語の元祖が移住集団とともに日本列島に持ち込まれたこととなります。この可能性を比較言語学的に厳密な方法を使って証明することは今のところ出来ていません。

第二のシナリオにも難点があります。混淆した一方の言語はおそらく移住者集団の言語でしょう。この言語には第一のシナリオが適用されなければなりません。他方の被侵略側の言語のほうでも、それを囲む親族の言語が消滅したのでしょうか。例えば、熊襲、出雲、長野など、縄文時代に行われていた小集団の言語が消滅したように。つまり、二つの言語の混淆が徹底して元の親戚の姿が影も形も見えなくなったのですから、両言語の周囲の親族言語も死滅した筈です。さもないと、新しい混淆言語が孤立して成り立つことができなかつた筈だからです。

日本語はクレオール^{*1}だ、だから系統関係は見えないとのだという主張があります。しかしその主張が尊重されるためには、その周りの親族言語が双方ともすべて「陥没した」ことを前提しなければなりません。さもないとその主張は思いつきだと言われても致し方ないこととなります。

第一、第二のシナリオにせよ、クレオールにせよ、ある言語が侵入して孤立した点に変わりはありません。違いは、侵入言語が侵入先にあった諸言語を完全に押しつけてすっかり入れ替わったか、それとも混じり合ったかにあります。後の場合、混淆がどの程度だったかが問題になります。いまのところ、基層の言語が見えません。従って混淆の程度も分かりません。混淆であったのか否かさえ不明です。だとすると、日本語はクレオールであるというのはただの憶測に過ぎません。

しかし考古学の最近の成果をふまえて敢えて推測するならば、今から5500年頃には日本列島とその周辺にはたくさんの小集団とその言語が在って、人々は盛んに交易をして歩いていた。遠距離の交易は千キロをはるかに超えていたのですから、それを可能にした通商用の広域通用語も存在した。そしてその三～二千年後、人口が日本列島の西部に片寄った頃、大陸・半島からの移民が始まり、その数はその後8世紀までで120万人ほどにまでなった。この時点で日本列島の西には上古日本語が、一方その東から北にかけては後のアイヌ語の元になった言語とその他のいくつかの古い言語が住み分けていたと考えられるのではないのでしょうか。

このようなシナリオを考える限り、上古日本語^{*2}というのは奄美・琉球語と上古日本語との間では考えられますが、それ以上の手がかりは無い。そして上古日本語とアイヌ語やそれ以外の文献時代以前の諸言語との間にはもともと系統関係の前提は成り立たないと考えるべきでしょう。従って、上古日本語より前の時代に関する内的構成（方言間の親探し）を比較言語学的に正当に行うための前提はもとも

と存在しないと言うべきでしょう。

このように、「日本語はどこから来たか」という問に対する上の二つの答は結局ひとつにまとまります。それは上の(1)で述べたような意味で「未詳」のままです。但し、上古日本語は日本列島の西部で成立したという条件をつけて。

上記引用でもわかるように、現時点ではタミル語起源説は完全に否定されているが、「世界言語のなかの日本語」はその理由を詳細に説明している。

そもそもタミル語とはどんな言葉なのか？

タミル語は、ドラヴィダ諸語という言語グループに属し、インドで第5番目の話者人口をもつ大言語である。南インド・タミルナードウ州を中心にインド国内に約6,080万人の話者を有する。タミル語は基本的に、母音を表す12文字、子音を表す18文字の計30文字から成るタミル文字で表記される。タミル語の発音でむずかしいのは、「r」や「l」にあたる音が、5種類もあることで、英語の「r」と「l」の聴き分けにも苦労するわれわれ日本人にとって、これら5つを区別するのは至難の業である。反り舌音（舌をうしろに反らせた発音）が多いのも頭痛の種であるが、語順は日本語とそっくりで、日本人にとって親しみやすい側面もある。

以下「世界言語のなかの日本語」からの引用は「斜字体」で示す。

『国文学解釈と鑑賞』（1995年2月号）掲載の「日本語とタミル語の関係」で大野晋氏は、『日本語論』（1994年11月号）所載の拙論（松本に触れられた。私はその中で、日本語（の祖先）が弥生時代のはじめに外部からの移住者によって日本列島にもたらされたという可能性は言語学的にほとんど考えられず、従って、日本語の同系語に擬された言語の中に、例えば稲作や米文化に関する“同源語”など発見されるはずもない。という意味のことを述べたが、これに対して大野氏は、「日本語とタミル語との対応は、少し外国語を読む人なら素人目にもはっきり分かるような明瞭なもの、むしろ明瞭すぎるもの」であり、従って「タミル語と日本語の関係は2,000年前から2,500年前の弥生時代に生じた」という氏の年来の主張をあらためて強調された。

問題の拙論は、日本語の系統論に対する見直しと新しい方法論への試みとして書かれたもので、特に大野氏の説を俎上に載せるというような意図は毛頭なかった。けれども、氏の日本語・タミル語同系説は、すでに10年以上にわたる本誌の掲載論文だけでなく、多くの著書・論文を通じて広く世間に知られ、その影響も小さくないと思われる。そこでこの機会に、氏の学説が言語学的にはたして成り立ち得るものかどうか、現代の歴史・比較言語学の見地から検証し、個人的な立場を一切離れて、以下に私の忌憚のない意見を述べてみたいと思う。

やはり、大野教授の論文の影響は少なくないという立場から、比較言語学者として検証する必要があるということを主張している。

「日本語とタミル語との間の語彙比較の問題点」

大野氏のタミル語同系説は、基本的には、これまで多くの日本語系統説がそうであったように、対象言語と日本語の語彙の中から意味と音形が類似した単語を探索するという方法に基づいている。氏によ

れば、タミル語と日本語の間には、これまでに基礎語彙を中心に500近い「対応語」が見つかったという。問題は、これらのいわゆる対応語が、氏の主張されるように、分岐してから2,000年ないし2,500年というような素人目にもはっきり分かる親近な同系関係を裏づけるに足るものかどうかである。

これらの対応語の探索は、タミル語の側では、主にバロウ・エメノー編『ドラヴィダ語源辞典』(Burrow&Emeneau1984)とほかにマドラス大学編『タミル語大辞典』が利用されたという。

氏によれば、前者には見出し語が5,618語(第2版)、後者には約10万語が収録されている。今かりに問題の対応語が『ドラヴィダ語源辞典』の見出し語だけから選ばれたとしても、500語という数は、全体の9%弱である。

一方、日本語の側で選択対象となった語彙の総量はどれくらいか。大野氏は上代日本語研究の第一人者で、岩波『古語辞典』の編者としても知られる。この辞典(初版)の見出し語は4万余であるが、氏の日本語・タミル語対応語の中には、古語だけでなく方言語彙や俗語のたぐいまで登場し、氏にとって利用可能な日本語のあらゆる語彙が総動員されたかに見受けられる。対応語として選び出された語数と総語彙との比率は、どんなに大きく見積もっても1%を出ないと思われる。従って、タミル語・日本語双方を平均すれば、同系説の証拠として示された約500の「対応語」は、対象とされた両言語の語彙全体から見れば、その5%にも満たないことになろう。

ここで我々は、この5%という数字に注目しなければならない。というのは、どんな言語の間にも音と意味が偶然に似通った類似語ないし疑似語というものが必ずあって、それが大体5%前後と言われている。従って、大野氏によって提示された500の対応語というものも、このような偶然の一致に由来する可能性が極めて高いのである。

もっぱら個別の語彙の比較だけに頼った系統論の最も陥りやすい危険な落とし穴がここにある。これまで言語学者は、このようなリスクを回避するために、いろいろな方法を考案してきた。例えば、厳格に意味領域を制限した一定の「基礎語彙」の範囲内で比較を行ういわゆる「言語年代学」(または語彙統計論)も、周知のように、このような偶然や悪意性を排除して、言語間の親近性を客観的に測定するための有力な方法とされてきた。

大野教授の説は日本語とタミル語の中に、意味と音形が類似した単語が500語もあるということがその根拠になっている。しかし、言葉全体の5%ほどの単語が類似しているということは、他の多くの言語についても共通に言えることで、もっと厳格な意味での比較が必要であると指摘している。

これは日本語学者と比較言語学者の違いだろうか？

私の見るところ、日本語とタミル語の間には、単に文法面での類似が見られないというだけでなく、文法構造の根幹に関わるもっと根本的な点で重大な相違があって、これはおそらく日本語・タミル語同系説にとって乗り越えがたい障壁になると思われる。

まず第1に、タミル語は名詞・代名詞に「性」「数」という文法カテゴリーを持っている。つまりタミル語は私のいわゆる「名詞類別型」言語に属し、この点で、日本語を含めた“環太平洋”の「数詞類別型」言語と明確に一線を画している。大野氏はタミル文語の指示代名詞が*i-*「こ」、*u-*「そ」、*a-*「あ」という日本語と同じ近称、中称、遠称という3項対立をなす点を日本語との著しい一致点として挙げられたが、タミル語にとってもっと重大な文法的事実は、この指示代名詞、例えば*i-*(これ)が、

ivan (男性単数)、ivaL (女性単数)、idu (中性単数)、ivar (男女複数)、ivei (中性複数) というように性・数に応じた形態変化を示す点である。

指示代名詞の3項的対立は、世界言語のいたる所で観察されるけれども、性・数によるこのような類別はどこにでも見られるものではない。ユーラシア大陸でこのような現象は、ほかでは印欧語、セム語、そして一部のカフカス話語（ほかにはシベリアのケット語とカラコルム山系に孤立するプルシャスキー語）に限られる。

第2に、タミル語の動詞活用は、語幹+時制接辞+人称接辞という構成を基本とし、この点でもユーラシア大陸の主要語族である印欧語、セム語、ウラル語、そしてアルタイ話語（の一部）と連携し、他方では、日本語を含めた太平洋沿岸部の大部分の言語とたもとを分かち。特にタミル語の場合は、この人称接辞が動詞幹だけでなく名詞にも付接してこれを直ちに述語化するという特異な働きを持ち、日本語の終止形の在り方とは根本的に異なっている。

第3に、品詞の区別に関して、名詞と動詞はどんな言語でも明確に区別されているが、形容詞は、名詞と動詞の中間的存在で、ある言語ではこれを名詞（あるいは体言）の下位部類として、別の言語では動詞（あるいは用言）の下位部類として位置づけている。今かりに前者を「形容詞体言型」、後者を「形容詞用言型」とすれば、日本語、アイヌ語、朝鮮語、そしてさらにアメリカ大陸を含めた太平洋沿岸部の多くの言語は、後者のタイプつまり用言型である。それに対してドラヴィダ語は、明らかに形容詞体言型の言語で、この点でもやはり、印欧語、セム語、ウラル語、アルタイ語と共にユーラシア内陸型の言語圏に帰属し、私のいわゆる「環太平洋言語圏」とは大きくかけ離れる。

ここまで来れば、大方の読者にとって拙文の結論はもはや明らかであろう。日本語とタミル語とを隔てる言語的な距離は、その地理的な隔たりと同じように、遠くかつ遙かである。今から2,500年前に、タミル語を話す人々が稲作と米文化をたずさえて日本列島に上陸したとか、日本語とタミル語との対応は素人目にもそれと分かるほど明瞭であるというような主張は、拙論の言葉をあえて繰り返せば、やはり「言語学的に全く根拠がない」と言わざるをえないのである。

これまでの議論で、私はいわば行きがかり上、大野氏の日本語・タミル語同系説だけを取り上げることになったが、これは必ずしも私の本意ではない。大野説に対してここに述べられたことは、おそらく、これまでの日本語系統論の中で、「北方説」にせよ「南方説」にせよ、列島外のもろもろの言語との間で唱えられた他の多くの同系説についても、多かれ少なかれ当てはまるであろう。それは、結局のところ、これまで多くの日本語系統論者が金科玉条としてきた古典的な比較方法というものが、拙論でも繰り返し述べたように、日本語の系統を解明するには、ほとんど役立たないということに起因している。日本語の系統論は、今や根本的な再検討を迫られているということをここに改めて強調しておきたい。

大野教授の日本語・タミル語同系説に対する上記松本氏の批判記事は、『国文学解釈と鑑賞』（1995年5月号）に掲載された。しかし、大野氏は出版社に事前閲覧の申し入れにより、松本氏の記事を手入れし、その記事に対する反論を同号に掲載するよう申し出を行った。しかも、その雑誌の構成は、大野氏の論の方が先に読まれかねないような配列となっていた。これは、第一人者である大野氏への出版社の配慮とはいえないだろうか？

「言語の同系性とその証明」

大野氏は同論（「日本語とタミル語の関係—松本克己氏のお返事に対して—」）の冒頭で、

言語学は「経験科学」であり、従って「南インドの言語と日本語が同系であるなんていうことは“言語学的にあるはずもない”と頭からきめてかからず、新たな事実そのものを見るのが経験科学のとする態度である」と述べられた。確かにお説の通りで、私も「日本語・タミル語同系説」を最初から頭ごなしに否定したわけでは毛頭ない。

私はここで、これまでの日本語系統論をめぐる論議がしばしば陥った不毛な水掛け論を避けるために、前もって言語の系統に関する次のような基本原則を明らかにしておきたい。

すなわち、現在の言語学は、条件を整えばある2つの言語が同系であることを証明することができる（これがどのようにして行われるかについては後に触れる）。しかし逆に、ある2つの言語が同系でないことを証明することは、現在の言語学では不可能である。

第1の理由は、少なくとも伝統的な比較言語学では、例えば1万年を越えるような奥行き深い言語史を復元するすべがなく、従って、2つの言語の同系関係がこのように古い過去に遡る場合には、それを確かめることが不可能だからである。

第2の理由は、現在世界で話されている人類のすべての言語が、何万年あるいは何十数年前に、アメリカのどこかで話されていた例えば“原始ホモサピエンス語”あるいは“人類祖語”というような単一言語に遡る可能性が決してないとは言えないからである。従って、南インドのある言語と日本語が同系でないと頭ごなしに断言するなどということは、私も含めて誰にもできるはずがない。

従って、もし大野氏が日本語とタミル語の関係について年代を特定せずに、単に同系の可能性があるとして漠然と主張されたのであれば、それを言語学的に検証するのは難しく、私も最初からそのようなことを試みなかったであろう。私がそれをあえてしたのは、氏の主張がこのように漠然としたものではなく、2つの言語は今から2,000ないし2,500年前に分岐した素人目にもはっきり分かるような近親な関係にあると明言されたからである。

この程度の年代幅の同系関係ならば、言語学的にそれを検証することは決して困難ではない。これまでの歴史・比較言語学の知見に照らせば、このような場合に生ずる言語間の相違と類似の度合いについては、かなりはっきりとした見通しを持つことができる。しかも、日本語の場合はおおよそ1,200年前に遡る文献資料があり、タミル語はもっと古い歴史をたどることができる。従って、かりに奈良時代にまで遡って両言語を比較すれば、その時点での分岐後の年代は、1,000年そこそこということになる。

分かれてから1,000程度の言語間の違いは、異なった言語というよりむしろ同じ言語の方言と見てよく、日常の簡単な会話なら、それほどの支障なしに話が通じ合えるだろう。日本語とタミル語の間に、はたしてそれほどの近親関係があるかどうか、拙稿で試みた検証の手続きとその結果は、虚心冷静な読者の目にはすでに明白だと思われる。

大野氏は、私が検証の中で約500語の氏のいわゆる対応語について直接触れなかったことを指摘され、「私の研究を否定するには、私の提出したタミル語が本物でないとか、歪曲してあるとか、対応の法則に合っていないとか、そういう確証を提出なさればそれで足りる。それをなさらない限り、私の研究は否定できないと思う」と述べられ、そして最後に、「松本氏がいくらドラヴィダ話語と日本語との相違点を力説せられても、日本語とタミル語との間には厳密な音韻法則に支持された約500語の対応語があり、古典語の助詞助動詞の大部分が用法と語法において対応している事実を否定できない限りその2つ

の事実は依然として日本語とタミル語との同系説の根拠でありつづける」と結論なされた。あたかも、問題の 500 語について氏が述べられたような意味での反証を挙げるができないために、それに触れるのを私が断念したかのように受け取られかねない。

私が大野氏の対応語に触れなかったのには、いくつかの理由がある。最大の理由は、限られた紙数の中でそれに立ち入る余裕がなかったからであり、2 番目として、すでに何人かの専門の言語学者がこれについて批判を加えており、改めての検証には値しないと判断したためである。しかし、上のような指摘がなされたからには、私としてもこの問題にある程度立ち入らざるを得ない。

そして松本氏は、言語の比較に不可欠な「対応」「同源」「音韻法則」といった概念について基本原則を明確にし、話を分かりやすくするために、英語から例をとり英語がタミル語と同じように、一般の日本人にとって遠い異国の名も知らない言語だと仮定し「仮説としての日・英同系論」を試みている。

普通に入手できる英語の辞書をもとに、日本語と意味・音形の似通った単語を探索し始めたとする。たまたま“woman”という英語が目にとまり、意味は「女」とある。同じ日本語の単語は、現在の発音は“onna”だが、古くは“womina”という形であり、英語も少し昔はほぼ綴り通りの発音だった。“woman”と“womina”、まさに1字1音正確に“対応”している。ただし現代の日本語では、語頭でw>ゼロという音変化が起こり、従って、英語と現代日本語の間にはw:ゼロという“音韻対応の法則”が確立される。とすれば、英語の“walk”「歩く」と日本語の“aruku”も、この音韻(対応の)法則によって、容易に対応語であることが知られる。英語のlとrは、どちらも日本語ではrで現れるからである。同様の理由によって、英語の“kill”は、日本語の“kiru”「斬る」に対応し、さらに“kill”とkoro-su「殺す」は、“iとoの交替型”にほかならない。日本語の「上」“ue”は、古くは“upe/upa”という形で、英語の“up”に正確に対応し、また日本語“soto”(外)と英語の“out”は、“s脱落型”の対応と見られる。このようなやり方で、この熱心な系統論者が次々と類似の単語を例えば500近く探し集めて、それを根拠に日本語・英語同系説を提唱することができる。

どんな言語の間にも意味・音形が類似した単語は5%ぐらいは必ず見出されると言われる。この5%の偶然の一致率というのは、言語年代学または語彙統計論で普通に使われる約200語の基礎語彙表では10語程度であるが、かりに2つの言語の間で1万語を含む対照語彙表が作成されたならば、その中の5%つまり500語がこうした類似語になる可能性を持っている。とすれば4,5万の見出し語を含む辞書を手に入れば、400や500の類似語を集めることは決して困難ではない。だからその気になれば、日・英同系説を樹立することも決して実現不可能な企てではないのである。

一方、これに疑問を持った別の学者がこの説に反論しようとした場合、どうすれば確実な反証を挙げることができるだろうか。これは一見簡単そうに見えて、実は非常に難しい。まず考えられるのは、この同系論者が挙げた数多くの対応語なるものをひとつひとつ丹念に取り上げて吟味を加えるという方法である。もし問題の単語が別の言語からの慣用語であるとか、新しい時期に作られた合成語であるとか、意味解釈や語形分析に間違いがあるという点を突きとめれば、少なくともその対応に関しては無効であると立証できる。

しかし、利用された辞書に詳しい語源的情報が含まれているか、あるいは信頼に足る語源辞書が別に用意されていて、論者があらかじめそのような疑いのある単語を用心深く排除していた場合には、この

ような対応語の個別吟味法はほとんど効力がなくなる。つまり、英語の“woman”と日本語の“womina”が歴史的に同源関係にある「対応語」であるのかそれとも単なる偶然の類似つまり「疑似語」にすぎないかを判別することは、この語例を個別に取り上げていくら吟味しても、立証はできないのである。

かつて大野氏の日本語・タミル語同系説が世に問われて間もなく、これを批判する村山七郎氏と大野氏の間で『国語学』誌上で論争が行われたことがある。しかし、この論争は結局実りのない水掛け論に終わった。村山氏の反論がこのような対応語の個別的吟味に終始し、大野説への決定的な反証にはなり得なかったからである。大野氏も本誌2月号の拙稿への評の中で、「私の挙げた500語をひとつひとつ吟味して欲しい、指摘があればいつでも調べ直して誤りがあれば撤回する」という意味のことを述べておられる。このような吟味法では大した痛手を受けないことを、おそらく村山氏との論争以来十分にご承知だからであろう。

「証明の手順と音韻法則」

一般に、上に例示したような形の個別の類似語の収集だけに基づいた同系説が、学問的に全く手に負えないとされるのはこのためである。意味と音形の類似した語が“対応語”として個別の形で提起された場合、それを証明することも反証することもそれ自体としてはできない。先にも述べたように、そもそもある2つの言語が同系ではないことを言語学的に証明するのは不可能だというのがその主たる理由（のひとつ）である。

一方、ある2つの言語が同系であることを証明することは、前述のように可能であるが、その証明は一体どのようにして行われるのか。学問的な証明のためには単に woman と womina、walk と aruku のような語例を数多く集めて、それを提示するだけではもちろん不十分である。これらが単なる疑似語であるか同系関係に基づく対応語であるかは、どちらもそれ自体では立証力がないからである。それが疑似語ではなくて真の対応語であることを証明する方法は、今のところ2つしかない。

そのひとつは、5月号の拙稿で試みた語彙統計論的アプローチで、このような類似語の共有率を一定の基礎語彙対照表に基づいて測定する方法である。もしこのような類似語が偶然の出現率をはるかに超えていれば、それが単なる疑似語でないこと的有力な証拠となる。これについては5月号の拙稿ですでに検証済みなので、ここでは繰り返さない。

第2の方法は、これまで歴史・比較言語学で最もオーソドックスとされてきたもので、集められた類似語の間に規則的な音韻対応、すなわち「音韻対応の法則」が認められるかどうかを吟味することである。もしこのような音韻法則が確立されれば、2つの言語の同系性はほぼ確実に証明されたと見なされる。このような法則性の存在によって、問題の対応が単なる偶然の所産でないことが明らかにされるからである。大野氏は、先の引用文の中で「日本語とタミルとの間には厳密な音韻法則に支持された約500語の対応語がある」と明言された。ここで氏が“厳密な音韻法則”によって何を意味しておられるのか定かでないが、この言葉はあまり安易に使ってはならない。歴史言語学のおさらいのようで恐縮だが、以下の議論のために、ここで音韻法則の正確な意味をはっきりさせておきたい。

今から百年以上前、青年文法学派と呼ばれる人たちによって確立された「音（韻）法則」の概念は、「書法則に例外なし」（すなわち「あらゆる音変化はそれが音変化である限り例外のない法則によって遂行される」）という彼らの高らかな表明にも窺われるように、例外を許容しないという厳しい制約が加わったものである。提起された音韻法則に対してひとつでも説明されない例外が見出されれば、そ

れだけで法則としての効力は失われる。

例えば、ラテン語の *cord* 「心臓」に対してドイツ語 *Herz*、同じく、*Centum* 「百」に対して *hund-ert* を対応語として取り出し、ここにラテン語 *c* (= /k/) : ドイツ語 /h/ という音韻対応の法則を樹立したとしよう。その同じ人が一方で、ラテン語 *habe-o* 「持つ」とドイツ語の *haben*、あるいはラテン語 *caput* 「頭」とドイツ語 *Kopf* との間の意味・音形の著しい類似を発見して、これを同じ対応語の中に加えたならば、このたったの一事例で、提起された音韻法則は崩れ去ってしまう。一たび /k/ : /h/ という音韻法則を樹立した以上、それを無視して /h/ : /h/ とか /k/ : /k/ という対応も認めるということは、金輪際許されないのである。

「グリムの法則」あるいはゲルマン語の音韻推移と呼ばれる音韻法則は、このような厳しいチェックを経た後にはじめて確立された。そしてこの法則発見のきっかけを作ったのが、大野氏も引き合いに出されたラスムス・ラスクである。ラスクの論文 (*Rask1818*) で重要なのは、挙げられた対応語の数が 300 か 500 かというような数の問題ではない。その対応語によって、ラスクがゲルマン語と他の印欧語との間の子音の対応に著しい規則性の存在することを発見した点にある。大野氏は、論著の中で頻りに音韻法則という言葉を使っておられるけれども、この言葉の本来の意味をはたして正確に理解しておられるであろうか。

「対応語の検証」

以上のことを念頭において、これから問題の対応語を検証する。500 語全部を総覧するのは紙面が許さないで、ここでは、大野氏が本誌 1 月号で示された 84 語のいわゆる基礎語彙と 5 月号で提示された助詞・助動詞の対応表だけを取り上げることにしよう。

まず、大野氏が 5 月号で挙げられた次の助詞・助動詞の対応を見てみよう。表 2. 2 を参照されたい。

日本語とタミル語の間で引き合わされたこれらの“対応語”の中に、子音にせよ母音にせよ、はたしてどのような対応の規則性が見出されるであろうか。

大野氏によれば、日本語の使役動詞を作る *-su-* は、タミル語の *-ttu-* に「まさしく対応する」という。もしこれが真の対応であれば、そこから日本語 /s/ : タミル語 /tt/ という音韻法則が導かれる。しかしこの法則は、一方で、日本語完了助動詞 *tu* : タミル語 *tt* という対応も、

日本語助詞 *tu* に対するタミル語 *attu* のペアも、対応語の仲間に入ることがを許容しない。/s/ : /tt/ に対して例外を作るからである。

このように、氏の対応語の中で互いに相容れないこの 3 種の語例が並列されていることは、まさにそれだけで、これらの対応の無効性を証明していると言ってよいだろう。

同様に、日本語 *nö* に対するタミル語 *iN*、日本語 *mö* に対するタミル語

表 2.2 日本語とタミル語の間での助詞の“対応”

助詞	日本語	タミル語	助動詞	日本語	タミル語
の	nö	iN	他動詞化	su	ttu
に	ni	iN	自動詞化	aru	ar, ir
も	mö	um	完了態	nu	nt
て	te	tu		tu	tt
と	tö	oTu	持続態	ri	ir
は	fa	vây	未来	mu	um
や	ya	yâ >ê,e	義務	bësi	vêNT
が	ga	aka			
か	ka	kol			
から	kara	kâl			
つ	tu	attu			

um を対応として認めれば、日本語 ni とタミル語 iN、日本語 mu とタミル語 um の語例は、母音に関して例外を作り、また日本語 nu (完了態) とタミル語 nt の対応なるものもはなはだ怪しくなる。

さらにまた、日本語 ka に対するタミル語 kol を対応語とすれば、日本語の ga がタミル語で aka という形で現れる対応は不可解である。日本語の助詞の ya は、ここで何食わぬ顔をしてタミル語の yā (>ē, e) と肩を並べているけれども、同じページの疑問詞の対応例の説明では、タミル語でこの yā から転じた ē, e は「日本語の i と整然と対応する」ことになっている。

このように見てくると、まことしやかに配列されたこれらの“対応”は、音韻対応の規則性とはおよそ無縁なもので、すべての対応が他のすべての対応に対して例外を作るといような状況が現出している。つまり何が規則で何が例外かさえ見分けがつかず、そこにあるのは混沌と無秩序以外の何物でもない。これはまさしく、英語の walk と日本語の aruku、英語の in と日本語の ni (助詞) 等々を結びつけるのと同じ流儀であり、意味と形が少しでも似通った疑似語が手当たり次第に集められた結果の混乱がそのまま露呈していると言わなければならない。

次に、大野氏が自信を持って示された基礎語彙 84 個の対応語であるが、これは全体で 3 ページの表になるので、そのままここに掲げるわけにはいかない。この表で重要なのは、12 箇条の音韻法則らしきものによって、これらの対応語が配列されていることである。従ってこの表を吟味すれば、氏のいわゆる音韻対応がどのようなものか理解できるだろう。

まず大野氏の示された 12 箇条の“音韻法則”のうちの半分は、

- 1) タミル語 a : 日本語 a, ö
- 2) タミル語 i, e : 日本語 i
- 3) タミル語 u : 日本語 u, ö
- 4) タミル語 c, t : 日本語 s
- 9) タミル語 p, v : 日本語 *p > f
- 12) タミル語 v, p : 日本語 w

というように、どちらかの言語で 2 つの音素が並列される形で表されている。しかし厳密な音韻法則というものは、決してこのような形で表してはならない。対応する音素は、双方で常にひとつでなければならないのである。従って、例えば第 1 の対応は、

- 1a) タミル語 /a/ : 日本語 /a/
- 1b) タミル語 /a/ : 日本語 /ö/

という 2 つの違った音韻法則にすべきである。そしてこの 2 つはそのままでは互いに相容れない法則であって、一方が真ならば他方は偽となる。これを両立させるためには、祖語に 2 つの違った母音音素を設定して、一方の言語での合流という音法則を別に確立するか、あるいは祖語にひとつの母音音素を立てて、他方の言語での分裂という法則を樹立する必要がある。それが示されない限り、このような対応は音韻法則としては成り立たない。つまり、厳密な意味での音韻法則は、理論的な祖語の音素の再建なしには樹立できないのである。

また言うまでもなく、ひとつの音韻法則は別の音韻法則と決して衝突してはならない。従って、

- 5) タミル語 c, t : 日本語 s

という対応は、

- 6) タミル語ゼロ (<c) : 日本語 s

7) タミル語 *t* : 日本語 *t*

のいずれともそのままでは両立できない。同様に

9) タミル語 *p, v* : 日本語 *f*

12) タミル語 *v, p* : 日本語 *w*

という2つの対応も、一方が真ならば他方は偽である。

このように、大野氏の音韻法則は、法則自体の提示が不正確で、しかも相互矛盾を含んでいる。

これをさらに個別の語例について見るとどうなるか。ここでもやはり先ほどの助詞・助動詞と同様で、すべての対応が他のすべての対応に対して例外を作るというのにほぼ近い状況が現出している。まず母音に関して言えば、

1) タミル語 *a* : 日本語 *a, ö*

という法則に対して、

acc-am=us-u (薄)、*kar-u : kur-o* (黒)、*ut-ir : öt-u* (落つ)、*upp-u : öf-ö* (大)

という例外があり (第1音節の母音に注目されたい。以下同じ)、

3) タミル語 *u* : 日本語 *u, ö*

に対する例外として

mu : mi (三)、*upp-u : sif-o* (塩)

が見られ、また

2) タミル語 *i, e* : 日本語 *i*

に対する例外として

tiNk-al : tuk-u (月)、*upp-u : sif-o*

が現れる。

次に子音に関しては、

5) タミル語 *c, t* : 日本語 *s*

という対応規則に対して *cepp-u : if-u* (言ふ)、*upp-u : sif-o* といういわゆる「*c*脱落型」が説明されない例外として現れる。

また、タミル語の母音間の *-cc-* は、*acc-an : acch-a* (津軽方言)、*acc-am : us-u* (薄)、*kacc-u : kaz-iru* (噛る) という具合に、*-cc- : -cch-*、*-cc- : -s-*、*-cc- : -z-* という違った3種類の対応がせめぎ合っている。

同じく、母音間の *-vv-* は、*avv-ai : app-a* (東北方言) では *-vv- : -pp-*、*kavv-u : kab-uru* (咬る) では *-vv- : -b-* となって現れる。

一方、母音間の *-v-* は、*kav-ar : kaf-a* (河) では *-v- : -f-*、*tûv-al : tub-asa* (翼) では *-v- : -b-* となって首尾一貫しない。

さらに、これらの語例を音節単位で眺めると、*upp-u : öf-ö*、*upp-u : sif-o*、*cûpp-u : suf-u* (吸う)、*tupp-a : tuf-a* (唾) という語例で、*-upp-*を含むタミル語の第1音節は全部違った対応を示している。

また、タミル語で *öL-* む音節は、*köL* に対しては *kör-ösu* (殺す)、*töL* に対しては *ta* (手) という食い違いを見せ、他方、*-al* を含む音節は、*kal : kar-a usu* (石臼)、*mal-ai : mör-i* (山)、*yal : yor-u* (夜)、*pal : fa* (歯)、*väl : wo* (尾) というように、これまたすべての対応が他のすべてに対して例外を作っている。

同様に、母音 *a* を含む日本語の開音節は、*ka-fina* 「腕」では *kai*、*ta* 「手」では *töL*、*na* 「汝」では

naN、fa「齒」ではpalというように、その“対応”は実に多彩である。

さらに加えて、大野氏の対応表を見ると、いたる所に「t~s 交替型」とか「a~u 交替型」とか「p~w 交替型」という意味不明の注記が現れ、これがまた対応関係を一層紛糾させている。

そもそも言語学で「交替」というのは、一言語の共時態の中で同じ言語形式が違った音形をとって現れる（例えば、日本語のtaとte「手」）というような現象を指して用いられ、通時的な関係を表す言語間の対応に関してみだりに用いるべき用語ではない。

しかしこれよりもっと驚かされるのは、上にも挙げた「c 脱落型」である。問題の語頭子音は日本語の側でも（例えばceppu : ifu）、タミル語の側でも（例えばuppu : sifo）のように、自由自在に対応語を作り出せる仕掛みとなっている。

さらにまた、大野氏の対応語のハイフンによる形態分析もまことにアド・ホックというか、融通無碍というか、例えば同じ4段動詞が「切る」ではkir-、「聞く」ではki-となって、その時々都合でどのようでも分割できるかのようである。

「結論」

大野氏の500語の対応について、ここでこれ以上吟味を続ける必要はないであろう。対応の内部矛盾と自己撞着は語数を多くすればするほど、増えはしても減ることはないからである。先にも述べたように、言語間で提起された対応語は、それが系統関係に基づく真の同源語かそれとも単なる疑似語かは、それ自体としては判別不可能である。大野説がこれまで数々の批判に耐えて存続できたのも、このような個別の類似語に内在する証明不可能性に負っていると言ってよいだろう。氏がことあるごとに「500語のひとつひとつについて吟味して欲しい」と言われる理由もおそらくここにある。

これらの対応語が真の対応であるかないかを証明するのは、対応語全体を通じての首尾一貫性と無矛盾性をおいてほかにない。音韻法則とは、この首尾一貫性が具体的な言語事実として具現されたものにほかならず、またこれが法則と呼ばれるゆえんは、例外を許容しないがためである。音韻法則が言語の系統関係の確立にとって決定的に重要なのは、これによっではじめて問題の対応が単なる偶然の所産でないことが立証されるからである。これに較べれば、対応語の数などは問題にならない。むしろ偽の対応は、数を増やせば増やすほど、自己撞着を目立たせるにすぎないであろう。

以上限られた紙数であるが、助詞・助動詞も含めて大野氏の500語の対応が単なる疑似語の集積にすぎないことをほぼ立証できたと思う。なぜなら、大野氏のいわゆる音韻対応の法則は、示された事例をざっと見渡しただけでも、いたる所に内部矛盾が露呈して、ほとんど法則の名に値しないことが明らかにされたからである。

同時にまた、私が本稿の初めで述べたように、氏の500語の対応語を改めての検証に値しないと判断した理由もおのずから明らかになったと思う。私が前稿で試みたような検証は、タミル語とドラヴィダ諸語についてある程度正確な知識を備えなければ着手できないけれども、このような個別の対応語の検証は、提出されたデータの整合性を吟味するだけで、ほぼ目的を達することができる。歴史・比較言語学の方法論をしっかりと身につけた人なら、そのつもりになれば、誰でもいつでも簡単に実行できるからである。

大野氏は、オックスフォード『ドラヴィダ語源事典』をもとに、タミル語と日本語との類似性を強

く認識するようになった。NHKテレビのドキュメンタリー番組では、南インドにおける調査の様子が詳しく紹介され、氏の生き生きとした説明が印象的だった。同系説を発表する前の大野氏にはかなり強いバイアスがかかっていたのではないだろうか？何だか無理やり“こじつけ”たという印象が拭えない。

大野氏の日本語・タミル語同系説に対し、松本氏は比較言語学の立場から詳細に矛盾を指摘している。ただ、真の同源語かあるいは単なる疑似語かは、それ自体として判別不可能であり、そのことが個別の類似語の証明を不可能にしている。

しかし、これだけ筋道を立て矛盾を示されれば、誰がどう考えても日本語・タミル語同系説は否定されざるを得ないだろう。後に大野氏は系統論を放棄し、日本語はクレオールタミル語であるとする説を唱えた。

※1 【クレオール】

異なった言語を話す複数の民族が接触・交流する場合、お互いに意思の疎通を図るための操作をする。そこではさまざまな言語事象が発生する。その一つがピジン (**pidgin**) と呼ばれる混合言語の発生である。16世紀以降、西欧人がアジアやアフリカ、そしてアメリカ大陸を植民地化していく過程において、現地の人々と西欧人の間で、また現地のプランテーションで働かされた労働者たちの間でさまざまなピジンが誕生した。ピジンを話す人はそのピジンのほかに自分の母語（第一言語）も保有しているので、バイリンガルである。しかし、生まれたときからそのピジンに接し、ピジンを母語として運用する世代が存在するようになるとき、それをクレオール (**creole**) 言語という。

※2 【上古日本祖語】

上古：文献の存する限りで最も古い時代。ふつう大化の改新のころまでをいう。

祖語：同じ系統に属する幾つかの言語が、分岐・発展する前にあったと想定される、共通の祖先に当たる言語。

(2020.08.10)